竜人少女

井上トシェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜人少女

【Ｎコード】

Ｎ００６６Ｙ

【作者名】

井上トシェ

【あらすじ】

何の因果か竜に見込まれ、異世界らしき所に引き込まれてしまった高校生、沙紀。「知の支配者」と呼ばれる美青年や、本物の王子様とともに、世界最強の存在である竜をめぐる大冒険が始まる。歴史とＳＦをベースにしたファンタジーという方向性です。今のところは古代ローマ風の歴史物を読むつもりでどうぞ。

1．沙紀、歓迎される。

気が付いたら異世界で、自分がいつの間にか英雄に祭り上げられていて、などという妄想にふけったことは、無い。マンガや小説で多少見たことがあるくらい。

それも、見た時にはかなり突っ込んだ。

「なんで言葉が通じるんだよ」

「どうして都合よく魔力が無尽蔵にあったりするのか、何の説明も無いし」

「超ご都合主義、ていうか、都合だけで出来てる」

突っ込むのも途中でばかばかしくなって、その後は一切そういう代物には触れずに生きてきた。

ＳＦに似たようなテーマがあるのは知っている。ただ、こちらはかなり哲学的な理由付けがされていたり、フィクションの外側にもう一皮も二皮もフィクションが取り巻くメタフィクションの構造があったり、何とかして読者に仕掛けの正しさを納得させようとする努力が見えて、これはこれで楽しかった。

でも、これは。

目の前に広がる雄大な景色を呆然と眺めながら、二の句が告げずにいた。

これはナンセンスだ。

ついさっきまで、学校でつまらない授業をつまらなく聞きながら、制服にいつの間にか付いていた糸くずをつまみ、これはどこで付いたんだろうかと推理していたはずだった。

そのうち眠くなってしまい、丸まった糸くずをノートに上に放り出し、机に乗せたひじが落ちないように気をつけつつ、あごを手の平に乗せて居眠りを始めた、はず。

ささやかな昼寝をむさぼり、不意に目が覚めてみたら、これだった。

眼下に広がる甍(いらか)の海。
岩が多く植生が少ない丘の上から眺めるその景色は、細かく街路で区切られた大小の建物が織り成す大都市の風景で、そのこと自体は珍しくもない。生まれてこの方、東京２３区内で大部分の時間を過ごしてきた身にとっては、建て込んだ街の風景など、何のありがたみもない。
それが目に新しく映るのは、その家々の大半が、現代日本ではありえない石造らしいこと。窓ガラスは見えないし、壁に木が使われている様子もほとんどない。
道路も石畳らしい。アスファルトのものとは根本的に違う、強烈な照り返しが目を灼く。
それらの、高くても5階建てくらいの建物がびっしりと軒を連ね、街を形作っている。その街の様子も、異様に見えた。
まず、電線がない。日本の街の原風景であるはずの、外国人から奇妙に思われるほど執拗に張り巡らされているはずの電線が、それこそ一本たりとも存在しない。
看板もない。原色で毒々しく飾られ、ひたすら街の美観を破壊し続ける看板が、それこそ一枚たりとも存在しない。
こんなのは日本じゃない、日本であるわけがない、そう思ったとき、私は決定的な違いを発見していた。
街を歩く人々が、金髪だったり、赤毛だったり、栗毛だったり、中は黒髪も多く混じっていたけれど、遠目に見ても、その姿はどう見ても日本人の姿には見えなかった。
そもそも着ている服が違う。教科書かマンガでしか見たことがない、ギリシア・ローマ世界の解説で出てくるようなチュニックや、やたら長い布地を巻きつけたような服装で人々が歩いている。
お蔭様で目だけはいいので、これは間違いない。
いったい何が起きているかは、想像すら出来ない。異世界、とや

らに飛ばされてしまったのかと、荒唐無稽なことを考え、その次の段階でそれを「ばかばかしい」と笑殺しようとして、私は失敗した。
どれだけ呆然としていたのかはわからないけれど、呆然とするままに凝然と丘上に立ち尽くす私に、後ろから声がかかっていた。
「お待ちしておりました、閣下、われらが救世主よ」
よろめく心をぎりぎりのところで支え直し、どうにか振り返ると、私の後ろには数人の男女がうずくまっていて、何を期待しているのか知らないけれど、感涙にむせび泣いて肩を震わせていた。
「……夢、にしちゃあ、ずいぶんリアリティにあふれた夢だわね」
「夢などではございませぬ、閣下がお出であそばすこの世界にこそ、現実の惨禍がもたらす不幸が満ち溢れ、我らはもはや夢を見ることもかないませぬ」
朗々と、あるいは切々と心情を唱え上げたのは、たぶん私の5倍は生きているだろうというご老体。頭にはほとんど毛が残っていなくて、代わりなのかどうか、凄まじい勢いで眉とひげが伸びきっていた。
老いたショーン・コネリーを三、四発殴って狂信性を足したような顔の老人は、目の色も青く、その彫りの深い顔立ち、どう見ても日本人には見えない。
どうも話している言葉も日本語とは思えないのに、なぜか理解できる不思議。
ちょっと待て。私は今、何語でしゃべっていたのだろうか。
昔読んだ小説に出てきた、統合失調症に悩む人が「自分が何語でしゃべっているのかわからない」と日本語で切々と訴えてくる場面が脳裏をよぎる。
「どうかそのお力を以って、我らを未来にお導き下さい」
私の混乱や戸惑いをよそに、感涙にむせんでいるのはそのご老体だけじゃなく、その後ろに控えてひざまずいている十数人の老若男女が、私を拝むようにしながら声を上げたり祈りをつぶやいたりしている。

ちょっと、いや、結構気味が悪い。
「何がなんだかよくわからないんだけれど、閣下ってのは私のことなわけね？」
「あなた様を措いて他におられますまい。光栄ある竜人閣下、偉大にして世界に屹立せる竜の代理人、そのお姿を拝し奉り、我ら一同、歓喜に堪えませぬ」
「ああ、そう」
荘厳なほどに飾り立てられた言葉の渦の中に、神を仰ぐような、信仰なんかかけらも持ったことがない私には不自然にしか思えないような賛仰の光を感じて、正直、ドン引き。
何が起きているのかはまったくわからないけれど、少なくとも、理解不能な事態に思いっきり巻き込まれていることだけは確からしい。

何がなんだかわからないけれど、何もしないわけにもいかない。
といって、自分がどこにいるのかさえもさっぱりわからない状態で、何が出来るってことでもないと思うので、とりあえず、慎重に事態に巻き込まれて様子を見ることにした。
丘を降りて街の中に入っていく。
私を先導するのは、集団の中にいた若い男二人。護衛役、らしい。私の周りには少なくともこんなごつい筋肉だるまはいなかった、と思うほどに、二人ともすごい体つきをしている。歩き方も、無駄な力は抜いていても、猫科の動物のような油断のない動きをしている。
元軍人かな。現役なのかな。
そんな風に思えた。
その二人の背中を見ながら歩くのは、さっきまで見下ろしていた街の中。
街はかなり大規模な様子で、都市、といっていい。建物も、一つ

一つが重厚で、がっちりしている。3年前、中学時代の家族旅行でイタリアに行った時に見た、ローマの街並みに似ている気がした。
ただ、建物の様式が違う。どちらかというと、そのときに一緒に見たポンペイの復元模型に似ていなくはない。近くで見ると木材が意外に多い。壁は石材だけれど、柱や梁、窓や庇には普通に木が用いられているし、石壁自体がぶ厚い感じがする。
上から見えたように、窓にガラスがはまっていないから、そう見えるのかもしれない。窓ガラスが無いからか、建物に鉄やアルミが使われているように見えないのも、そう思える理由かもしれない。
石材の生成りやベージュの色と、木の褐色、屋根を葺く赤褐色のレンガの色で、街が出来上がっていた。
その建物に囲まれている道路は、日本ではまず見ない、石畳。うちの近くにも石畳に似せたような歩道はあるけれど、がっちりと石が敷かれた道を歩いたことは、たぶん私には無い。
道路にはくっきりとわだちが刻まれている。私が見た現代のローマの街路のような角がすっかり取れてしまったようなわだちではなくて、くっきりと、はっきりと、深いわだち。ちょっとでも規格に合わない荷車が通ろうとしても、そのわだちのせいで進めなくなるんじゃないかと思えるくらい。
古代ローマでは、道路に刻まれたわだちに合う荷車以外は街の中に入れないようになっていた、という話を聞いた、気もするけれど、どうだっただろう。うろ覚えでさして自信はない。
それから、帝政期のローマの街は、昼間は荷車が街の中には入れないようになっていたはず。理由はうろ覚えだけれど、確かにこの街路の中をガラガラと荷車が日中一杯行き来していたら、道の両脇に店を広げる商店は商売が成り立たなそうだし、ロバや馬が動力源の荷車は、現代の自動車よりよほど扱いが難しいだろう。事故も多かったはず。
でも、この街では、帝政ローマのような規制は無しらしい。結構耳に痛いような大きな音を立てて、私たちの歩く列の横を、大きな

荷車が馬に引かれて行き過ぎていく。
荷車の車輪は大きな木製で、ゴムが張られている形跡は無い。ぱっと見だから自信は無いけれど、鉄板が張ってあったように見えたし、そんな感じの音だった。
ちょっと気になったのは、荷車が上下にゆさゆさと揺れていたこと。
あれ？　古代ローマの馬車や荷車に、バネってあったっけ？
車軸と車台を直接くっつけず、バネを間に入れて作れば、揺れも少なくなるし耐久性も上がる、ということを人類が発見したのは、たしか近代かそのちょい手前くらいのはず。なんか車の歴史を特集したテレビ番組で、そんなのを見た記憶がある。
バネ、というか、サスペンションが付いている馬車があるということは、少なくともここは古代ローマの世界じゃないらしい。
自他共に認める大の歴史オタクである私の知識が、この異常な状況の中で、なんとか正気を保つ、か細いよすがになっている。
自分がどこにいるのかわからない、想像も付かない、というのは、その事態に陥ってみると、混乱以外の何物でもない。現代の世界にこんな光景はまずありえず、どこかのテーマパークに紛れ込んだにせよ、自分が未知の言語を話すという常軌を逸した状況の中に放り込まれてしまうことは無いはず。
そんな中で自分を保とうとしたら、か細い知識を頼りにして、何とか自分が置かれた状況を探っていくしかない。自分の立ち位置を確認していくほか無い。
というわけで、ぐるぐると考えながら、自分の目に入ってきたものを片っ端から分析しながら歩いている私に、周囲の人々はいろいろと話しかけようとしていた。
でも、肝心の私がまるっきりそれに応じようとしないから、次第に話しかけにくくなってしまったらしい。
私は完全に無視していた。だって、それどころじゃないし。
何を私にさせようとしているかは知らないけれど、「閣下」なん

ぞと呼びかけてきた以上、相応の敬意を払う気持ちはあるんでしょう。なら、私にいろいろ観察させる時間くらいちょうだいよ。

そういう理由。

たぶん、いつも私が友達や家族から言われてきたことを総合して考えると、私はかなり気難しそうな顔をしているのだろう。

あんたが考え事してる顔をして黙ってると、怖い。友達からはよくそういわれた。別に考え事をしているわけじゃなくても、無言でじっと何かを観察したり分析したりしているとき、私の顔は仏頂面を通り越して恐ろしいほどの表情になるらしい。

17才の多感な少女をつかまえてなんてことを。

というと、友達の一人は、

「可愛げでもあれば多感って認めるけど、あんたのどこから可愛げが出てくるのよ」

と斬り捨てていた。

うーん。ごもっともで。

父方の祖母に、ため息混じりに言われたのは高校入学間もない頃。

「この子はせっかく綺麗な顔に生まれたのに、誰に似たのか愛嬌がごっそり欠けているから、どう見ても人好きのする女の子には見えないのよね。これからどうなるのかしら」

何のフォローも無くばっさりと斬って捨てられた観のあるセリフだけれど、滅多に人に褒め言葉なんか吐かない祖母が、少なくとも顔のことは褒めているのだから、私としちゃ充分な気がしたもんだ。ただ一緒にいた母はこのセリフにカチンと来たらしく、「どなたの血筋でしょうかしら」と返していた。

でも、否定はしなかった。なるほど、母よ、あんたもそう思ってはいるわけだね。

実際に家系かどうかは知らないけれど、身内からも太鼓判を押されるくらい無愛想で愛嬌が無い人間なので、初対面の人間にとっては、まして「閣下」と呼びかけなければいけない相手では、私が無言で歩いていると、とても話しかける気にはなれないらしい。

まあ、便利といえば便利。こっちも、そんなに人とのふれあいを求めてジタバタするような性格ではないのだし。

そうこうしている内に、私を囲んで歩くご一行様は、街路を幾度か曲がり、古い城壁跡らしい一帯を越え、新市街のわりとひと区画が広い地域に入り、ある邸宅の前で立ち止まった。

緑が急に増えたな、と気付くくらいには緑が多いこの一帯で、その邸宅は特に広いというほどではないけれど、一つの階に１２世帯が入る私の家のマンションより、敷地自体は広い気がするから、たった今通過してきた旧市街の狭さから考えれば、まず広いといっていい。いつの時代にもある、高級住宅地というやつか。

２階建のこの建物の正面には、私を先導していたごっつい兄ちゃんたちと同じような風体の、頑丈な男たちが立っていた。

ただ、兄ちゃんたちと違ったのは、その服装。

兄ちゃんたちは古代式の短衣で、足元は皮のサンダル履き。腰に皮製の鞘に収めた短剣を差している。

邸宅前に立っていた男たちは、長衣を着ている。トーガ、とここでも呼ぶのかどうかわからないけれど、本にも載っているような、長い布を肩から垂らすようにして着る、古代ローマの男性の正装と同じようなものを着ていた。

着ている服が違うのに風体が似ている、と思ったのは、髪を短く刈り込むようにしたごつい体つきの男たち、という共通点があったからだろう。すごく、男くさい集団。今の日本じゃなかなか見られないような。よく見れば、顔付きも似ている。

私たちの集団を認めると、その男たちはさっと両脇に避け、扉の前に道を作る。

歓迎はされているらしい。

建物は、ぐるっと柱廊がめぐらされた大きな二階建てらしき建物にいくつかの付属施設が付いた広壮なもので、おそらく中庭なんかもあったりするに違いない。

その正面の扉は、数段の大理石造りの階段を上った柱廊の先にあ

り、黒光りする木材に豪奢な浮かし彫りがされていて、高さは私の身長の倍近く、圧倒されるような大きさだった。
トーガの男二人がその扉を押すと、意外に軽そうに開いた。どう見たってくそ重たそうなのに、よほど建て付けがいいんだな、と妙なところに感心していると、中の光景はさらに私を感心させた。
いや、感心してる場合では全然無かったんだけれども。
建物は、議会か何かで使われているらしい。
中は人がごったがえしていて、大きく半円形に配置された椅子に、いかにも政治家という男たちがドンと居座っている。その周囲には、有力者婦人といった感じに着飾っている老若の婦人たちや、秘書役か何かかと思われる若手の男たちがいた。
そしてその中心、部屋の奥真ん中に据えられた椅子に、この日の主役と思しき人がいた。
短衣の上から胸甲などの防具をつけ、兜までかぶった衛兵をそばに従え、椅子に寄りかかって悠然と脚を組む若い男性。
トーガを優雅に身にまとい、ひざに置いた左腕には繊細な彫刻が入った金のブレスレットに大振りな金の指輪。緩やかに波打つ少し長めの金髪を後ろに流すようにしている。
その顔、秀麗。きりっとした眉が、その下にあるちょっとたれ気味の甘い目を引き締めていて、精悍なほほのラインと、ちょっと女性的なやさしさがある細いあごのラインとが絶妙なバランスで交じり合っている。
あら、きれい。
面食いじゃないと自分では思っているけれど、そのお顔の綺麗さには素直に感心した。
その綺麗な青年は、私が会場に入り、続々と後ろからお付の人々が入って、扉が閉まると同時に立ち上がった。
建物の天井は全部が屋根に覆われてはいなかった。真ん中の部分が大きく開いていて、その周囲に頑丈そうな布地がまとめてある。たぶん、雨が降ったらそれを閉めて屋根にするんだろう。

だから建物の中はずいぶん明るかったんだけれど、その青年が立ち上がると、まるでその周辺にだけぱっと光が差したような、荘厳な音楽無しで登場しているのが信じられないような、明らかに存在感が他の人間とは違うという、そんな男だった。
「お待ちしていた、異界の方」
明瞭な発音が何語であるかはわからないけれど、私にはしっかり意味がわかったし、それについて深く考える余裕が無かった。
「戸惑いもおありとは存ずるが、我らはみな、あなたを歓迎するためにここにいる。お心安んぜられよ」
青年はやわらかい笑顔。鋭さより、こちらを安心させようとする誠意が勝っている感じがする。
「ここは」
と、青年は両手を軽く広げた。
「クレスという。この一帯の首府であり、まもなく王国の首都となる都市だ。治安は良い。その旨も安んじられたい」
王国？
その単語が出てくる時点で、ここは少なくとも古代ローマの時代やその領域じゃないことがわかる。帝政だろうと共和制だろうと、ローマの領域に王はいない。属国ならまだしも。
「この建物はクレスの元老院議場であり、このお歴々はクレスの元老諸氏だ。竜人であるあなたを第一に迎え入れられる光栄に、みな感激しておられる」
青年がそうふるから、私の視線も周囲の貴顕淑女に向く。その私のたぶんかなり無愛想な視線の先で、元老諸氏とその奥方と思しき人々が、どこか緊張した様子で、それでも私に向けて笑顔を送ってきた。
内心がどうあれ、とりあえずこの小娘に敵意は持っていないらしい。
「申し遅れたが、私はヴァレンティウス・カルス。しばらくあなたの保護者となる者であり、『知の支配者』と呼ばれる者だ」

保護者。
とりあえず、右も左もわからない私を保護してくれる人はいるらしい。
そして、カルスというこの人は、たいていの事情は知っているらしいことを一言で表現してみせた。
私の名前を、正確に発音してみせたのだ。
「あなたを歓迎する。荻原沙紀どの」

2．沙紀、説明される。

カルスに案内されたのは、元老院議事堂の裏手にある建物。
回廊でつながっているその建物に行くまでの間に、やっぱり中庭があった。緑にあふれた空間の真ん中にはお約束の噴水。確かローマ型の都市では、上水道を引き込んだ先に噴水を作るのが、当たり前に見られる光景だったはず。
ここはローマじゃないらしいけれど、少なくとも、それに極めて似ているのは確かだし、何とか自分がいる所を理解しようと思ったら、乏しい知識を総動員してどうにか考えていくしかない。
「しばらくはここを宿泊所に当てたいと考えている。色々と話もせねばならぬし、聞きたいこともおありだろう」
カルスは身長も高い。ほっそりとした体つきに見えるけれど、意外に広い肩幅から考えて、体型が出にくいトーガの下の体は、結構がっちりしているはずだ。
その後についてゆっくり歩き、宿泊所に当てられるらしい建物に入る。
その建物は、議事堂ほど大げさではないものの、立派な邸宅だった。復元模型で見た、古代ローマの有力者が住んでいた住宅に似ている。
なんていったかな。
「このドムスはしばらくあなたに貸与する。好きに使われよ」
そうそう、ドムスだ。都市の一戸建て。集合住宅は確かインスラ。
このドムスはもともと元老院議事堂が建てられる前からあったもので、ある有力者の建物を取り壊して議事堂が建て替えられた際、街に一緒に買収されて、他都市の有力者や外国からの使節の宿泊施設として整えられたらしい。
回廊から続くドムスの玄関は、もともと貴族の邸宅だっただけあって、柱も壁も綺麗に飾られている。手入れが良く行き届いている

ところから見て、住人はいなくても、ちゃんと管理人はいるらしい。
というところまで考えて、私は気付いた。
そうか、古代ローマに似ているってことは、奴隷制もあって当然ってことか。
私も現代日本で育っている以上、奴隷が身近にいた経験も無ければ、それで維持されていた家系に育ったわけでもない。黒人奴隷が酷使されていたアメリカの歴史も、土地付きの農奴で社会が成り立っていた近世ロシアも身に染みては知らないし、まして古代社会の奴隷制なんて、実感としてわかるはずがない。
ドムスの扉が開いて、中にいた人々の姿を見て、私はこの人たちがこの家を管理しているんだろうな、というのがすぐにわかった。
管理人さん、という感じじゃない。それは、家付きの奴隷、という表現が、本当にしっくり来る感じだった。ひざまずいて私たちを迎えたその姿は、卑屈とはいわないまでも、けっして私たちを仰ぎ見ずにじっと床を見ているその姿勢といい、身に着けている粗末な短衣といい、決して自由市民が自分の職業として選んでここにいるというようには見えない。
「彼らがこのドムス付きだ。好きに追い使ってくれてかまわない」
カルスは私の複雑な気分に気付いたのかどうか、さらりとそういうと、その人たちの前を通り過ぎ、奥に向かった。
ドムスの玄関から入った奥には、薄布を張った部屋があって、そこがこの邸宅の応接室になっているらしい。
後で知ったことだけれど、この部屋はタブリヌムといい、書斎や応接室に使う、邸宅の主人用の部屋なのだそうだ。
邸宅は、石造りであまり内装に温かみはなかった元老院議場とは違い、木材がふんだんに使われ、壁には壁画もあり、様々な場所にカーテンがかけられてやわらかい雰囲気を作り出している。人が快く住めるように、居心地よく感じられるように出来ている。
タブリヌムに入ると、窓がないけれど、薄いカーテンは天井までかかっているわけじゃなく、その上から光は充分に入ってくる。カ

ーテン自体薄かったし。
その意外に明るい空間の中で、カルスと私は二人で椅子に座った。ちょうど、テレビで各国首脳が会談を行うときのような位置関係で、奥の壁に背を向けて、小さなテーブルを間においている。
そこには、すぐに薄い陶製のカップが運ばれてきた。
運んできたのは身奇麗な女性で、この人は奴隷ではないらしい。それがわかるのは、金の装飾品をつけていたから。ネックレスや髪飾りに金を使う奴隷はいないだろう。
カーテンの外にはカルスの侍従か秘書かという３０代前半くらいの男性と、フル装備ではないものの物々しい雰囲気は相変わらず身にまとい続けている衛兵数名が控えていて、とても二人きりで話をするという雰囲気ではないけれど、まあ、いくら綺麗なお顔の人とはいえ、この完全アウェーの状況の中で、得体が知れない相手と二人きりになるなんてのはどう考えても嫌なこと。
「一息入れよう。どうぞ」
そういってカルスがカップを手にした。
いわれてみれば、私はついつい昼寝を始めてしまった授業の前に、一口紅茶のペットボトルを含んで以来、一滴も水分を取っていない。
もっとも、その私と同じ体でここに存在できていたら、の話ではある。もしかたらＳＦで昔読んだ話のように、たまたま多重世界の重ねあわせで最も条件に適合していた他人の体に、うまく入り込んでしまっているのかもしれないし、そもそも全部夢の可能性だってある。
そんなことを考えながら一口飲んでみて、私は、その味が意外に馴染み深いものであることに安心し、その渋みと甘みを堪能し、そして時間差を置いて驚いた。
その驚きが、カルスにも見えたらしい。
「お気付きかな」
「き……気付くでしょう、これ、お茶じゃないの」
「そう、紅茶だ」

しかも、アイスティー。
中国原産のお茶がヨーロッパ世界に伝わったのは、一応諸説はあるらしいけれど、どう考えたって古代のはずがない。中世の王様たちがティーブレイクなんて話、聞いたことがないでしょ。大航海時代が始まった、その後のはず。
ついでに、砂糖だって、そんなに古い時代からあったわけじゃないはず。私がすぐにこの甘さは砂糖だとわかったくらいだから、雑味が少ない、精製された白砂糖のはず。そんなもの、古代にあったとは思えない。
「舌に合うかと思ったのだが」
「そりゃ合うけどさ。なんでこんなものがここにあるのよ」
竜人閣下、などと呼ばれて持ち上げられたからか、思いっきりタメぐちになってしまった。
もっとも、カルスは気にしているようにも見えない。
「紅茶は多少希少性が高い商品だが、別に無いわけではないし、珍しいわけでもない。あなたが存在していた世界ほど普及はしていないがね」
「輸入しているの？　シルクロードか船で？」
どうしてもお茶は東方のものというイメージがあるからそう尋ねたけれど、カルスはごく軽く肩をすくめて否定した。
「一応、わが国で生産されているものだよ」
「砂糖も？」
「砂糖も、だ」
「サトウキビがあるわけ？」
「いや、ビートだな」
「ちょっと待ってよ、ビートの生産って確かナポレオンが大々的に始めたんじゃなかった？」
思わずそういうと、カルスははっきりと笑った。
「そこまで知識があるとは驚きだ。年齢に似合わぬ博覧強記とは聞いていたが」

「いやいやいや、その反応ってさ、ナポレオンを知ってなきゃ出来ない反応だよね？　ありえなくない？」
古代ローマの世界とはちょっと違うらしいけれど、それにしても、時代もはるか後代の英雄のことを、なぜこの男は知っているのか。わたしのことを良く知っていることより、なぜかそっちが気になった。
「まず誤解を解いておこうか。ここはローマではないし、その時代ではない。というより、その世界ではない」
衝撃的なことを、笑顔のまま軽く言い放った。
こいつ。
「詳しいところはおいおい説明していくとして、とりあえず今の質問に答えてみようか。わが国では昔からビートの生産を行っているが、もともとは葉を食べるためだった。そこから糖をとる方法が見つかったのはここ２・３０年ほどの事だが、人間の欲というのは、商品の普及にとって最高の材料だな。あっという間に普及した」
「でも、サトウキビを使うよりずっと難しいんでしょ？」
「そうでもない。遠心分離機を使うのは一緒だし、それはたいしたテクノロジーがなくても作れる。要は結晶化が出来ればいいのだからな」
大した博覧強記でいらっしゃる。私のことをいっておいて、カルスの方がよほど物をよく知っている。
「もっとも、まだまだ効率は良くない。精製の方法が未熟なのと、化学的な合成法の知識が不足していることの双方が問題だ」
「さすがは『知の支配者』でいらっしゃるわね、良くご存知で」
思わずきつい言い方になったのは、知らず知らず、この男の知識が得体の知れない領域にあることに警戒し始めていたのだろう。
カルスはそんな私の言い方も気にならないらしい。
「『知の支配者』は、すべてを知っているわけではない。だが、少なくとも竜人の質問にならたいていい答えられる程度の教養は求められる」

「その竜人っていうのは何なの」
私はカルスの悠々とした態度が気に食わず、大上段から切り込んだ。
カルスはもったいぶらなかった。
「竜の眷属、という言い方をされることが多いが、要するに竜にうっかり選ばれてしまった人々のことだ」
「選ばれた？　竜？」
「竜というのは、この世界では実在の存在だ。滅多に見られはしないがね。様々な異能を持っているこの存在に選ばれたごくごく少数の人間のことを、一般に竜人と呼ぶ」
「私は選ばれたわけ」
「選ばれたのだ。あなたにその自覚はないだろうが」
「求めた覚えも無いしね」
私の声は相当不機嫌に聞こえているはずなんだけれど、カルスは全然動じない。
「その点についてはご同情申し上げる、としか言いようが無い。実のところ、私が『知の支配者』などという役回りを演じているのも、同様の理由からだ。私自身はそのような役割を求めたことは無いのだが、ある日突然、その立場になってしまった」
「私も同情してさしあげた方がよろしくて？」
皮肉バリバリの口調でいうと、カルスは片方の唇だけゆがめて笑ってみせた。
「いらんよ。おかげでなかなか得難い経験を積んでいる。満足とは言わぬが、これで結構面白く生きている」
「ああ、そう」
反論する気も失せて、私は脚を組み替えて、ひざの上にひじを乗せ、立てた手の平にあごを乗せた。お行儀なんか知ったことか。
「さっきもいった通りだが、詳しい事情はおいおい説明していくことになる。今の時点で把握しておいてほしいのは」
いいながら、カルスも脚を組み替えた。

「まず、あなたがこの世界の人間ではないということ。何も物理法則が違ったりする訳ではないが、かなり面食らう場面もあるだろう。それはそれで受け入れてほしいというのが一つ」
私は黙ってうなずいた。カルスは続ける。
「それから、あなたはこの世界にとっては、いってみれば異物だ。その存在そのものから様々な衝撃や軋轢も生じてくるだろう。それについて、常に意識はしてもらいたい」
「まあ、当然ね」
私はうなずいた。
「何もかも受け入れられる保証も自信も無いけどね」
「神じゃあるまいし、そこまでは期待していない。あなたが理性的な人間だということは知っているし、ここまでのやり取りでそれは充分証明できている」
カルスが軽く手を広げた。
「慌てない、ということが、物事を悪化させない一番の方法だということを把握してもらえればいい」

3．とりあえず着替えてみる。

あなたはこの世界にとっては、いってみれば異物だ。
カルスのセリフはまったくそのとおりなわけで、私の姿はどう見ても異世界人だった。
まず、制服。
異世界にどうやって来たのかは知らないけれど、私は学校で居眠りをするまでは間違いなく着ていたはずの、グレーのブレザーに黒っぽいスカートという何の個性も無い制服を着ていた。
カルスがいうには、あまりこの姿で街には出ないほうがいいという。
「スカートといったか、その服装はあまりにも扇情的過ぎる。我々の文化に、まともな女性がひざ上まで素足をさらして歩くということはありえない」
まあそうだろうな、と思う。
私はスカート丈の短さに命を賭けられるほどいい脚の持ち主、なんて自信は無いので、それほど大きく上げているつもりはないけれど、それでもまあ、短くないとは言わない。
季節は初夏だから、初夏だったから、冬場のようにタイツなんかはいてないし。普通に黒のハイソックスをはいている。当然、ひざ上の生脚は公開状態。
まわりに女子高生なんかいなくても、女子高生なんてそんなもんだとみんなが思っている東京にいる限り、この姿がどう見えるかなんてさほど気にしたことはなかったけれど、女子高生自体が存在しない世界に来てみると、なるほど、ちょっとこの格好は異様かもしれない。
それから髪や瞳の色も、肌の色も違う。
ただ、これはさほど目立たない気がした。
この街、クレスには、色々な肌の色の人がいて、髪の色も様々だっ

た。人種の混交が進んでいるのか、それとも色々な人たちが集まっては散っていく街なのか。

とりあえずこの姿で街に繰り出す気には全然なれなかったし、街の様子や事情なんてそのうち嫌でもわかりそうな気がしたから、私は休憩することにした。

カルスに案内された部屋は、ドムスの奥にある噴水を囲んだ中庭に面した一室で、残念ながらやっぱりドアはない。壁に窓らしきものがないから、確かに扉を閉めたら真っ暗だけれど、冬の間なんて人が住めないんじゃないだろうか。どうなんだろう。

壁には絵が一面に描かれている。絵がかかっているんじゃなく、土壁に直接。この部屋に描かれているのは、田園風景らしき絵だった。木立の中に小麦畑らしき畑が広がっていて、その向こうに海が見える。歴史の教科書なんかに載っている壁画より、現代の風景画に近い気がする。

やっぱり異世界だから、絵の文化なんかも元の世界とは違うんだろうか。そう考えてみれば、絵の遠近感が古代の絵とは思えない気もしたけれど、絵画史にそれほど詳しいわけじゃないから、あまり深く考えるのはやめることにした。

調度はけっこうさびしい。というか、寝台一台に小さなテーブルが一つあるだけで、他に何一つ置かれていない。生活感が無いにも程がある、と思いつつ、日本の部屋は何もかも置き過ぎている、と外国人には見えるらしいという話を思い出して、こっちの感覚がおかしいのかな、と思い直したりする。

寝台は、小学生の頃に「派手なだけで何が面白いんだろう」と思いつつ見た記憶がある、ハリウッド製古代ローマ世界スペクタクル映画の中で見た、まさにそのままというもの。眠るためのベッドというより、体を横たえるための台、という感じで、映画ではこれに横たわりながらローマ人たちが食事をしていた。布団がしいてあったりはせず、木製の寝台の上に麻布がかけられているだけ。

腰掛けてみて、これで寝るのかな、とちょっと疑問に思った。結

構このままだと硬いぞ。ふかふかベッドなんかいらんけど、これで寝るのは嫌だな。
ほとんど無意識に腕時計を外して、テーブルの上に置き、あっと思った。
私には元の文明の象徴がいくつもあるじゃないか。
あわてて立ち上がって全身を探る。
文明の象徴があった。
携帯。
携帯電話、というより、ほとんど携帯辞書か携帯百科事典と化しているスマートフォンを取り出し、画面を見てみると、当然ながら圏外のマーク。
まあそれはいいとして。いやよくないけれど、どうなるものでもないから諦めるしかない。
カルスが「博覧強記とは聞いていたが」とかいっていたけれど、私の知識はたいがいネットから引っ張るか、たまに本まであたって調べたりしたものなので、ネットにつながらない状況ってのは結構ずしんとくる。
知識なんか無くても要領よくやっていける、頭の回転が速い女ならいいけれど、あいにく私は人よりちょっと多いらしい知識だけを頼りにこそこそ生きてきた女だから、これは困ったことになるかもしれない。
なってるか、充分。知識なんかあろうが無かろうが。
ちょっと迷ってから、私はスマートフォンの電源を切った。
どうせ使えないし、何かあったときに充電が切れて後悔はしたくない。まあ、電源を切っていても、長い間放っておけば、自然放電してしまうんだろうけれど。
そんなことを考えているうちに、ついに、私は不安に襲われてしまった。
ここまでは、緊張感やありえないほど現実離れした出来事に振り回されて、感じることも無かったことに、うっかり気が付いてしま

った。
私は、とんでもない事態に巻き込まれている。たった一人で、何も知らない場所で。
どうなるんだろう。
どうしたらいいんだろう。
何が出来るんだろう。何をするべきなんだろう。何をしちゃいけないんだろう。
いきなり襲ってきた不安の嵐、恐怖が私をわしづかみにした。
気温はそんなに低くないけど、暑くもない。過ごしやすくて、空気も乾燥している。
なのに、全身が熱くなって、手の平には冷たい汗が出てきて、急に視野が揺らいで、私は立っていられなくなった。
寝台に座り込んだ私は、鳥肌が立って、本格的に震えが来て、目に汗が入った拍子に涙もこぼれて、嗚咽が始まり、うずくまった。
なんなのよ。
なんでなのよ。
こんなこと、私は一度も望んでない。
他の奴にしてよ。
現実から逃げたがって異世界を夢見てる奴なんか、掃いて捨てるほどいるじゃない。
何でそういう奴じゃなくて、私なわけ。
帰してよ。戻してよ。
なんなんだよ。

薄暗くなった頃、私はむっくりと起き上がった。
目ははれぼったかったけれど、涙はとっくに乾いている。
泣いたところで状況が変わるわけでもないし、絶望しようが呪おうが、時間は勝手に過ぎていく。
私は弱々な人間だから、泣きもすれば震えもするけれど、それを

ずっと貫き通すほど執念深くも恨み深くも出来てない。
仕方ないか。
そう思えるところまで行ってしまえば、そういうスイッチが入ってしまえば、涙も止まるし震えも収まる。多少時間はかかるけれど。
私は寝台から身を起こして伸びをした。
考えてみれば、それほどひどい状況というわけでもない。
一人で荒野に放り出されたというならともかく、「知の支配者」カルスという保護者がいて、理由はわからないけれど言葉がきちんと通じて、雨露しのげる家屋が与えられて、これは結構な待遇だ。自分が置かれている状況が全然想像も付かないというのが気になるけれど、まあ、その内わかるだろう。
私が何をすればいいのか。私は何が出来るのか。その辺りだけでもわかると、だいぶ気が楽なんだけれどな。
泣くだけ泣いたら、気分は切り替わっていた。
自分が強い人間だと思ったことはないし、たぶん大人になって世間に出たら、おろおろするばかりでろくな事は出来ないんじゃないかって思っていたけれど、意外に図太く出来ているのかもしれない。
まずは着替えたいな、と思った。
いつまでも制服じゃいられないし、外に出られないんじゃ困る。
私は完全なインドア派だから、どちらかというと出不精な方だけれど、これからずっとここにいられるわけでもないでしょう。着るものくらい自分で着られるようになってないとね。
部屋の出入り口にかけられているカーテンを開けて、人を探そうとすると、正面に見える噴水を囲む中庭に数人の女性がいて、私の姿を見るとすぐに立ち上がって一礼した。
思わずこっちもお辞儀を返すと、女性たちはあわてたようにひざまずいた。
いやいや。そうじゃなくてね。
「あの、私にも、ちゃんとした服ってもらえるものですか」
恐る恐る聞いてみると、よく見ると実はかなりビビッていたらし

い女性たちのうち最年長と思われる一人が、勇気を奮い起こすようにして立ち上がり、
「直ちにご準備申し上げます」
と高らかに宣言してから、ばっと別の部屋に駆け込んだ。
そんなにご大層なことなんですね、私の世話ってのは。
ちょっと大げさすぎやしないかい、と私がかすかにうんざりしていると、その女性が衣類らしきものをひとそろえ抱えてきた。
着方を教わるつもりで部屋の中に入れると、自分が着せる気だったらしく、すぐに私の服に手をかけようとした。
「ちょっと待って、自分でやりますから、色々教えて下さいませんか」
私がいうと、それも驚きだったらしい。
ジャケットからどんどん脱いで行きつつ話を聞き出すと、貴族などの高位の女性は、自分で衣装をつけることはあまりしないらしい。なにしろ、美容関係の奴隷だけで数十人抱えている大貴族もいるという。
「なにそれ、まさか雇用対策なわけ？」
と私がいってもぴんと来ないらしく、いつの間にか人数が増えて4人も部屋に入ってきていた女性たちは、首をかしげている。数十人は行き過ぎでも、数人の奴隷にかしずかれて着替えをさせる光景って、かなり当たり前らしい。
女性たちに囲まれて素っ裸になるのってめちゃくちゃ抵抗があるけれど、出て行ってもらっても、私は下着の着け方すらわからないわけで、一時の恥はかき捨てだ、と開き直ってみるしかない。私はブラからショーツまで一気に脱ぎ捨て、完全な裸になった。
女性たちは私が身に着けていたものをものめずらしげに見ていたけれど、私がこの世界の衣装なんか全然知らないってことは、カルス辺りから聞いていたのかどうか、理解していたらしい。着るべきものを順番に出してくれた。
まず、下着。

どんな下着をつけるのか、ふんどしでもつけるのか、それとも帯状のものを巻きつけるのか、ど漠然と思っていたけれど、違った。

それは、さすがに現代式のショーツとは違ったけれど、ちょうどトランクスのような感じの下着だった。男性用のトランクスより小さいけれど、綿で出来ているらしい下着は、腰で紐をまわしてしばること以外、現代の下着と大した違いはない。

これって生理のときはどうするんだろう、と思っていたら、これとは別に、ふんどし型の下着があって、それに当て布を入れたり、海綿を入れたりして巻きつけるらしい。海綿ってスポンジだよね。スポンジか。うーん。

胸に着ける下着も、発想は現代と変わらなかった。

タエニア、というらしいけれど、要は、胸を寄せて上げるという発想の元、胸に当たる部分に当て布を入れた胸帯を巻く。胸がゆさゆさ揺れるのを防ぐと同時に、谷間を演出するわけだ。

昔も今も、女の考えることは一緒だ。

まあ、ゆさゆさ揺れるような胸も、素敵な谷間も、私にゃ無いわけだけれどね。

それらのほか、胸元から下腹部にかけて汗取りの生地を巻いていく。

それが終わると、短衣（チュニカ）を着る。現代でいうチュニックと大して変わらない。薄手の生地でできた短いワンピース型の服で、腰に紐を回している。袖は無い。素材はたぶん木綿だと思うけれど、冬になると羊毛に変わるみたいだった。

色が意外だった。教科書的なイメージでは生成り色でそれほどカラフルなイメージはなかったけれど、ちゃんと色もあるし、ぼかしたり刺繍で模様を出したり、しっかりおしゃれしている。

私が着せられたものは青かった。藍か何かで染めたんだろうと思うけれど、詳しくはわからない。

地域的にここはそこまで寒くはならないようで、たとえば毛皮を着たりすることはあまりないらしい。

それを着ると、カスチュラというペチコートのようなものを着た上から、かかと丈くらいの長いものを着る。ストラ、というらしい。胸の下とウェストのところにそれぞれ細い紐や鎖を回して絞るようになっていて、私が着せてもらったのは、華奢なデザインの銀の鎖。高いんじゃないのか、これ。大丈夫か？

寒い時期にはもっと着るらしいけれど、今日はここまで。正式な礼装をするわけじゃないから、というのもあるらしいけれど。

着てみると、現代の洋服と違って巻きつけるものが多いからあまり楽な感じはしない。これも慣れなんだろうか。

これでもまあ、女の端くれではあるので、初めて着る服はなんとなくうきうきするし、さっきまでパニックで泣いていたくせに、今はすっかり楽しくなっていた。

女性たちも、私がのんきに楽しんでいるのを見て安心したのか、雰囲気がほぐれてきた。「竜人」とやらになってしまった私の機嫌が、この人たちにとっては一大事らしい。

私も出世したもんだ。

日が落ちてきていたから、途中から灯火が入っている。油が入った皿に芯を入れる形式のもので、よく時代劇なんかで見る日本のものとあまり変わらない。蝋燭じゃなかった。

油の焦げる匂いなんか台所で少々かぐぐらいのものなので、匂いでどんな油が使われているかはわからない。でも、石油っぽい感じだけはしなかった。動物性の脂が焦げる匂いとも違う感じだから、たぶん植物の油だと思うけれど。

そろそろお腹もすいてるんだけど、それをいうとまたこの人たちがばたばた走り回って準備を始めちゃうのかなあ、おにぎりで充分なんだけどなあ、でも米って栽培されてる雰囲気じゃないよなあ、などと私がぼんやり考えつつ、着替え終わってすっかり片付けられた部屋の中で寝台に腰を下ろしたとき、遠くドムスの入り口を越えた先、元老院議事堂からつながる回廊の方から、ざわつくような声が近付いてくるのがわかった。

またカルスが来たのか。別の客人か。吉報か、凶報か。
身構えて事態の推移を待つ私の身に、次なる出会いが訪れたのは、十秒後のことだ。

4．馬車に大いに揺すぶられる。

馬という生き物に、私は全然縁が無かった。興味も無かったし、牧場なんか近くにあるわけもなかった。

急に乗れといわれても乗れるはずもないわけで、馬車というものが発明されていたことに私は感謝した。

したはずだった。

ところが。

こいつがもう、凄まじい乗り心地。

まず、車輪にバネが付いてるといっても、付いてるだけ。ぼよんぼよんと揺れると、揺れっぱなしで跳ねまくる。

「ダンパーってもんはないの」

思わず、悲鳴を上げた。

一応、五〇ｃｃバイクの免許は持っているので、サスペンションとダンパーの区別くらいはつく。サスペンションがバネで、ダンパーがその揺れを吸収する減衰器。

それが無いのかと私が怒鳴った相手は、馬車の横を涼しい顔で騎行するカルス。

日が落ちて薄暗くなった野原でも、その顔がはっきりと確認できる己の視力が腹立たしい。

「あるさ。あなたの知っているダンパー、あるいはショックアブソーバーと呼ばれる機械ほどの性能が無いだけで」

「知ってるなら仕組みくらい教えてあげればいいじゃない」

「『知の支配者』はみだりにその知識を公にはできない」

「けちっ」

馬車は、一頭の馬が、ちょうど小さな風呂桶のような形をしている箱の両側に大きな車輪が付いているものを、ガラガラと引いている。映画「ベン・ハー」で見たような、古代ローマの戦車競争で使われた戦車と比べると、だいぶもっさりしている。格好は良くない。

しかも屋根も無い。
本来は一人で乗る物らしいけれど、今日はまったくの素人の私が乗るということで、特別に御者つき。
この御者がまた、カルス並みに平然とした顔で立っている。手綱を引いて馬車を操る、その姿勢のいい立ち姿は、非常に安心ではあるのだけれど、漆黒の肌に乗っている表情が極めて涼しげなので、見ていてちょっと腹が立つ。
メディクス、と名乗っていた。
私の着替えが終わってすぐにドムス（邸宅）に入ってきた数人の男たちのうち、名乗ったのは三人。そのうちの一人が、彼、メディクス。
メディクス、というのはあだ名らしい。この世界ではあだ名をそのまま通称として使い、さらには姓にしてしまうことがよくあるらしい。日本ではあんまり考えられないけれど。
「もともとは医師です。今は半分以上兵士になってしまっていますが」
メディクスという単語、そもそも医師という意味の言葉だ。本名はちゃんと別にある。
「偉大なる竜人閣下、クィントゥス・ラエティウスと申します、お会いできて至上の幸福です」
と名乗ってもらったのは一時間ほど前のこと。ずいぶん若いお医者さんだな、と思ったけれど、聞けば、家業が医者だから物心付いたころからずっと医業を仕込まれていて、成人する頃には実際に患者もよく診ていたらしい。
カルスも背が高くてほっそりしているけれど、メディクスはもっと研ぎ澄まされた感じ。脂肪の薄い体に鋼の着肉が張り付いている、軽量級のボクサーのような体つきをしているのがわかる。
私とカルスの会話の意味はよくわかっていないようだけれど、私が馬車の揺れを耐えがたく思っているのは充分わかるようで、
「今しばらくお待ち下さい。じきに到着です」

と、あまり慰めにならないことを口にしてくれた。
なぜ慰めにならないか。
だって、もう何度目だ、そのセリフ。
私の馬車の、進行方向右側の脇をカルスが騎行しているのだけれど、左側にも随行者がいる。
こちらは、巨漢。
でかい。
カルスの長身が小柄に見えかねない大男な上に、筋肉の塊で体中を覆っているような、恐ろしいほどに頑強な体つきをしている。
私も決して小さいほうじゃない。現代でも日本人女子としては大きい部類の、一六七センチある。この世界の人々は人種もばらばらだから一概には言えないと思うけれど、観察している限り、現代人よりちょっと小柄な気がする。私より小さい男性がずいぶん多い気がした。
でも、この男たちに囲まれていると、自分が小柄で華奢な女の子に感じられてくるから不思議だ。電車に乗っていてバスケ部の集団に囲まれてしまったとき以来。うっかり自分がかわいらしく思えてきかねない。
その中でも特に馬鹿でかいこの人は、フォカ、と名乗った。白い肌を金の体毛できらきらと光らせ、マッチョな体を大柄な馬に乗せている。往年のシュワルツェネッガーみたいな人だ。年は若いはずなんだけれど、落ち着きがあるからか、年齢不詳の雰囲気がある。
この人はあまりしゃべらない。しゃべる役はカルスとメディクスに任せているみたいだ。
ちなみにフォカ、という単語は「アザラシ」という意味らしい。
筋肉はすごいしでかい体だけれど、アザラシのようなずんぐりした感じには見えない。どうして「フォカ」になったのか、ちょっと気にならないでもない。
この大男が馬に乗っていると、馬の方が気の毒に見えないこともない。

私が持っている馬のイメージは、だいたいテレビで見た競馬のサラブレッドか、時代劇なんかの騎行シーンから来ている。そういう現代で見られる馬は、世界各地で見られる様々な種類の馬の中では、結構大きな種類だということは知っていた。

だから、目の前に何頭もいる馬が意外に小さな体格だったことに驚きはしなかったけれど、どう見ても二メートル以上ある筋肉ダルマの巨漢に乗られる馬を見たら、そりゃ同情したくなるのが人情というもの。驚いたのは、その見た目に関わらず、その馬が平然とフォカを乗せ、悠々と歩いていることだった。

小柄でも、かなり頑丈に出来ている馬らしい。

ちなみにフォカも、フォカという本名じゃない。

「ガイウス・サエニウスと申します」

と名乗っていた。

メディクスもフォカも、名前がふたつで出来ている。この世界のルールではどうなのかわからないけれど、少なくとも私が知っている古代ローマのルールからいえば、この二人は貴族の出身ではない、ということだ。

貴族と呼ばれるような階級の人々は、名前のほかに姓を二つ持っている。家族名と、氏族名だ。

たとえば、史上有名なカエサル。彼の名前はガイウス・ユリウス・カエサル。

名前がガイウス。その後ろのユリウスというのが氏族名で、カエサルというのが家族名。

「ユリウス氏族のカエサル家のガイウス」

という意味。

この氏族名というのは、簡単に付けられる性質のものじゃない。貴族である証なんだから。

だから、平民階級の人間は、どれだけ資産を持っている商人だろうが、どれだけ武勲を上げた将軍だろうが、氏族名を名乗ることはなかった。

たとえば、共和制ローマ最後の守護者といわれる大ポンペイウス。軍事の才能だけなら古代ローマ史上トップクラスの偉大な将軍で、共和制ローマ元老院の代表者としてカエサルと内戦を戦った人だけれど、この人の名前は「グナウエス・ポンペイウス」。氏族名は無し。大地主の長男として生まれ、実家の富を背景に軍団を編成して戦争に加わったところから、彼の偉大な履歴が始まるのだけれど、どんなに大金持ちのボンボンでも、自分で作った軍団を率いて大戦果を上げようとも、非貴族階級は氏族名を名乗らない。

そういえば「知の支配者」カルスは、ヴァレンティウス・カルスと名乗っていた。

この場合、ヴァレンティウスというのは、私が持っている知識を総動員して考えると、氏族名にしか聞こえない。ということは、彼は貴族の出身ということだ。

中にこれでもかとばかりに綿が入っているとはいえ、こう振動が激しいと決して座り心地がいいといえない馬車の椅子にしがみついている私の横で、涼しげに馬を流しているカルスの横顔を私がにらみつけていると、カルスはその視線を受け流すのが楽しみとでもいうかのように軽く笑顔を見せる。

この笑顔、なるほど、美貌や知性まで持って生まれやがった貴族の小生意気なボンとしか思えん。むかつく。

そもそも私がなぜ馬車になんぞ乗っているのか。

理由は至極簡単。

私が馬に乗れないからだ。

着替えが終わった後、ばたばたと騒ぐ音がした。それは訪問客があるからだとすぐにわかった私は、一応、着替えたばかりのこちらの衣装で品良く立ってお出迎えした。

先頭に立って来たのがカルスで、その後ろに数人の男たちがいた。どれも若い。

その中に、私が乗っている馬車の御者役を買って出てくれたメディクスと、左隣で馬を歩かせているフォカがいた。
「沙紀どの、これからあなたにはこの世界のことを学んでもらわなければならないが、まずはそのサポートをする人間が必要となる。私ももちろん協力はするが、実際に目で見た方が早いだろう。色々なつてをたどって見学に行くことにしたい」
カルスが説明するには、この街、クレス自体は、治安もいいし竜人に対する理解もあって過ごしやすい場所だけれど、城壁を出た街の外になれば話は違ってくるという。
「最近はだいぶ良くなったが、それでもいきなり戦争が始まることもあれば、山賊追いはぎの類が出ないということもない」
と、怖いことをいう。
こっちは平和ボケのニッポン人だぞ。そりゃ世間には変な奴はたくさんいたけれど、いきなり殺し合いが始まるようなところじゃ育ってないんです。脅すなよ。
「王国が出来てまだわずかしか経っていない。首都をどこに置くかすら、つい最近決まったばかりだ。王家が立つまでは、その辺りの食いっぱぐれが山賊になって荒らしたり、隣国がいきなり攻め込んできたり、まあ色々大変だった」
そんな色々大変だった時期を乗り切るために戦ってきた人たち、その代表者が、メディクスでありフォカだった。
「彼らはクレス防衛隊から始まるミュシア王国騎兵隊の指揮官だ。まだ若いが、これでもミュシア全軍に冠たる猛者だ」
とカルスはいった。何のことやらわからないけれど、若いなりに偉い人たちらしい。
「彼らと、彼らの指揮者に話を通してある。まずは、このミュシアという地域を理解するために、この辺りの視察を行ってほしいのだ」
カルスは本題に入った。私に見学ツアーをさせる気らしい。
確かに、カルスにくどくど説明されつつ眠気に耐えるよりは、外に出て色々と見せてもらった方が理解も早いし楽しいはず。

だいたい、自分がいる場所の見当すら付かないのが困る。せめてなんとなくのイメージくらい欲しい。
それには、街の中を歩き回ることと、ちょっとでもいいから外から眺めてみるのがいい。
私は、自分が生まれ育った東京の都市としてのでかさを、別の地方都市に行って初めて実感できるようになった。外から見るのって、中を知るのと同じくらい大事。
カルスがいうには、さすがに王様にじきじき国を紹介してもらうのは難しいらしい。
「いやいやいや、そんなの私も望んでませんけれど」
「竜人ともなれば、その立場は大国の指導者をも凌ぐ。おいおい説明するが、そのことは頭に入れておいて欲しい。このミュシアの王も、あなたの前では同格にもなれない立場だし、必要があればあなたの前に平伏することすら厭わないだろう」
淡々という。
「だが、何しろ建国早々ということもあるし、つい先ごろの戦後処理の真っ最中ということもあって、王も恐ろしく忙しい。有体に言えば、あなたに構っている暇がない」
「なくていいってば、お偉いさんに会うのなんか、遠慮できたらそれに越したことはないんだし」
私が正直にいうと、カルスは苦笑した。
「それでは困る。何度でもいうが、竜人は非常に高貴な身分なのだ。本人がどう思おうがね。それはともかく、きちんとした立場の人間が案内すれば、どこに見学に行こうが事が円滑に運ぶ。その相手を紹介したいのだ」
「あんたでいいんじゃないの」
無愛想きわまる声で私がいう。大概態度の悪い女だ。エリカ様か。後ろで聞いていたメディクスやフォカも、ちょっと意外そうな顔をしている。
カルスは相変わらずで、ちっとも気にした様子がない。

「私でももちろん構わない。だが、私には、全くといっていいが、権力がない。みな『知の支配者』として敬ってくれはするが、実際の権限は何一つ持たない身でね」
カルスが私に紹介したいのは、その新しく出来た王国の、騎兵隊を仕切っている将軍なのだそうだ。メディクスやフォカの上官、ということだ。
「この二人を送ってきたのは、即日来られない非礼を詫びるためだそうだが、明日にでも本人がこちらに来るようだ。近くにはいるらしいが」
「近くってどれくらい」
とっさに聞き返したのは、単純にこいつらが「近い」というのがどのくらいの距離感なのか知りたかったから。
「さて、距離でいえば五ミッリアリウム程度かな」
カルスが後ろの男たちに確認する。いかにも理系人間的な黒人男性がそれに答える。もちろん、彼がメディクス。
「二分の十一ミッリアリウム程度かと」
分数で表現するのが古代ローマの風習というのは知っていたから、実際に聞いてちょっと驚いたけれど、すぐに換算できた。約五・五ミッリなんとか。
「つまり、あなたの知る単位でいう、約八キロメートルというところだな」
カルスが換算してくれた。
たしか、ミッリアリウムというのはローママイルのことで、一・四八キロメートルくらい。
その程度は「近く」らしい。車もバイクもない時代だけれど。
「こっちから歩いていくにはちと遠いか」
と私がつぶやくと、カルスたちは聞き逃さなかったようで、突っ込んできた。
「あなた自身で行かれるおつもりか」
「うーん……まあ、行った方が早いかなあ、とも思うし、色々見て

回らないとさ、わからないことが多すぎて、自分が何をしたらいいのかイメージつかめないんだよね」
　正直なところをいうと、カルスはうなずいてくれた。
「確かに、早めに色々見て回った方がいいだろうが」
「でも、城壁の外って出ないほうが無難なんでしょ」
「護衛がいれば構わぬ。メディクスやフォカはおそらく望むべき最高の護衛役だ」
「だったら、事情が許すんなら私の方から挨拶に行くよ。騎兵団の将軍様だって、私に会いにわざわざ出向いてられるほど暇じゃないんでしょ」
「そうしてくれるのなら、ありがたかろう。どうだ」
　カルスが後ろに確認する。
　一団の中で一番でかい人、フォカがうなずいた。
「カルマニアの残党狩りもひと段落着いて、兵馬を休ませている折だ。お出で下されば、騎兵たちの様子も見られて一石二鳥でしょう」
「決まりだな。それではそのように手配を」
　カルスがいうと、フォカとメディクスがさっと身を翻した。その素早い動作が、見ていて快い。
「では、あなたも準備をされるがよい」
「へ？」
　いきなり振られて、私は素で聞き返した。
　カルスはごく当たり前のようにいった。
「早速、行こう」
「はい？　これから？　え？　もう夜なのに？」
「部屋は暗いが、外はまだ明るい。今から行けば騎兵団の夕食にも間に合うだろうしな」
　意表を突かれた。てっきり明日の話だと思っていたのに。
　まあ、別に見たいテレビが見られるわけでもないし、友達と会う約束もなければ、遅いとくどくど文句をいう母がいるわけでもない。
　非常にさびしい女に成り果てている今、別にお誘いを断る理由も

無いか。暗くっても、護衛がいれば安全だって判断なんだろうし。
「てか、準備っていったって、準備するものなんかなーんにも持ってないんですれど」
「そうだったな。では、これから出かけるという気構えだけは作っていただこう」
「作ったってば。もったいぶらないで、さっさと出ようよ」
私はつっけんどんにいいながら歩き出した。その後に控えている悲劇も知らず。
その悲劇は、元老院側とは別にある道を通り、外に出てすぐに私に襲い掛かってきた。
考えなくたってわかるけれど、八キロメートルって、一言でいうけれど結構な距離だ。まともに歩いてたら二時間コース。まして私みたいなお荷物つき。
そりゃ、歩いて行くわけないよね。騎兵団の指揮官たちだって紹介されてるんだし、なおさら。
で、外に出たら、いたわけだ、馬たちが。
乗るのか、これに。
誰かが前か後ろに座ってくれていれば、騎士道伝説のお姫様よろしくぽこぽこ乗っていけないでもない気がしたけれど、期待はあっさり崩された。
もちろん、私の期待やらなんやらをぶち壊すことに関しては第一人者に成りつつある、あの男によって。
「たぶん無理だろうな。その服が乗馬に向いていないのももちろんだが」
と、カルスが冷静に指摘する。
「馬に乗るというのはそう簡単なことではない。あなたも知っているとは思うが、彼らの乗る馬には鐙が無い」
あ。
そうでした。そうでしたね。
大の歴史オタクが知らないわけはない。古代ローマの時代、人類

はまだ鐙というものを知らなかった。
あぶみ、というこの道具は、要するに馬に乗っている際に足を置くためのもの。馬に乗るための足がかりにしたり、乗っている時に踏ん張ったりする道具だけれど、これが発明されることで飛躍的に馬が乗りやすい動物になった。
それまでは、馬に乗るというのは、特殊技能といえた。だから古代史では騎兵という存在が非常に貴重だったし、それが育つ土地の傭兵たちが大活躍していた。生まれた頃から馬に慣れ親しめるような環境に育たないと、なかなか乗りこなせない代物だったのだ。
逆に、鐙が普及するにつれ、馬に乗ること自体は大した特殊技能ではなくなり、常に馬に乗って原野を駆け巡るような場所ではない農耕地域の人間でも、騎兵となって働けるようになった。
たとえば中世ヨーロッパの花である騎士は、それまでの歴史では見られなかったような長大な槍を持ち、ありえないほどの重装備で戦場に出たものだけれど、これは、鐙のおかげで馬の上でしっかり踏ん張れるようになったから、出来るようになったことだ。裸馬に乗って出来ることじゃない。
その鐙が、無い。
「まあ、乗っているだけならば大丈夫とは思うが、万が一ということもある。しっかり練習してからでなければお勧めは出来んね」
というわけで、私のお馬さん同乗計画は、思いついた瞬間に崩れ去ってしまった。
そこで出てきたのが馬車、というわけだ。
邸宅にもともと存在していたらしいこの馬車、最初の乗り心地は良かった。なにしろ椅子のふかふか具合が素晴らしくて、鉄製の板バネ数枚が重なった上に乗っかっている車台も、結構いい乗り心地なんじゃないかなって思えた。
結果、甘かったけれどね。
バネ自体の性能がどんなに良くても、その振動を抑える物がないと大変なことになる。私は強烈な乗り物酔いでその教訓を叩き込ま

れることになってしまいましたとさ。
ちゃんちゃん。
いや、まだこの長い一日は終わってない。残念なことに。

5．アヴェ・ドゥラコ！

陣営に到着した頃には辺りは真っ暗。
そして私の顔は真っ青だった。
冗談抜きで、完全に乗り物酔い。
吐くようなものが一切胃に残っていないから、吐いたのは胃酸だけだったけれど、陣営に着いて最初にしたことがゲロってのも情けない。
まあ、カルスが気を利かせて、私を下ろすのにわざわざ陣営の外、人目を避けられる物陰にしてくれたのはありがたかったけれど、それにお礼をいう程度の余力も無い。
「しばらく休まれるがよろしかろう」
ということで、たぶんメディクスが私を寝かせる場所を準備してくれたらしい。
そこは本職お医者さんだけあって手回しが良くて、木の柵でぐるりと囲まれた陣営地の中に幔幕をめぐらせた一画を作り、寝台を運び込んで私を寝かせた。そのまま、ここが私の今日の宿泊地に指定されている。
しばらく横になっていれば、所詮乗り物酔いだから調子は戻ってくる。
「どうせあなたを歓迎する準備の時間も欲しがるだろうから、ゆっくり寝ていたほうがいい」
カルスは陣営地側の都合からも、しばらく寝ているよう私に伝えると、自分は「その準備の手伝いくらいはしてやらんとな」と言い残して出て行った。
横であーだこーだと語られてもつらいだけなので、むしろありがたかった。
幔幕の外にはメディクスとその部下がいるらしく、気配は感じるけれど、決して中に入ってこようとしたり、うるさく騒いだりはし

なかった。
三〇分ほどもするとさすがに気持ち悪さも収まった。ちょっとうたた寝もしたから、だいぶ楽になっている。
身を起こすと、明らかに寝癖が付いている髪に気付き、ちょっとあわてた。閣下とか呼ばれておいて、寝癖ぴんこ立ちで登場ってのもきついでしょ。すでに乗り物酔いでげーげーやりながら登場という大失態をやらかしてるってのに。
幸い、口をゆすいだり顔を洗ったりしやすいようにというメディクスの気配りか、水桶とたらいが幔幕の中に置いてある。これで鏡まであれば女心を知り尽くしているというところだけれど、さすがにそこまでは気が回らなかったらしい。
もっとも、鏡くらいは自分で持っている。
制服のポケットに入っていた手鏡。
携帯と一緒に、元の世界の記憶を引きずらないように置いてこようとも思っていたんだけれど、これでも一応女。その心得として、せめて代わりの鏡が手に入るまでは持っておこうと思い、巾着袋を用意してもらってその中に入れて持ってきていた。
それでいてブラシやくしまでは持ってない辺りが、私らしいといえば私らしい。
あまりぱちゃぱちゃ音がしない程度に水で髪を濡らし、桶の横に置かれていた洗いざらしの布で水気を取り、鏡でチェック。
ブラシも持ち歩いていないくせに私は髪が長い。
いやいや。
かばんには入ってたのよ。
メイクもしなければコンタクトが必要なわけでもなく、私の必需品なんて対して存在しないんだけれど、くしくらいはもらっておいてもいいかな、と思ったりする。
すっかり暗くなっている陣営には、各所にかがり火か何かが焚かれているらしい。幔幕の中には無いけれど、そのすぐ近くには明々と燃えるたいまつがあるようで、その火の光が届いてくる。眼が暗

さに慣れているから、それでもどうにか寝癖チェックくらいは出来た。
後頭部にもっさりしていた寝癖までは見えないけれど、手触りでどうにかする。
寝癖が引っ込んだところで、私は匂いに気付いた。
あからさまに漂ってくるのは食事の匂い。
木があちこちで焚かれている匂いにまぎれて、はっきりと、食べ物の匂いがする。肉が焼ける匂いや、香草に火が通る香り。
ついさっきまではこんな香り、嫌がらせかと思ったのだろうけれど、胃がひっくり返るような気持ち悪さが収まってしまえば、こっちに来てからまともな食事なんかしてないんだから、当然お腹は減ってる。食欲だって出てくるというもの。
「誰か、います？」
幔幕のそばまで寄って声を出すと、すぐに反応があった。
「メディクスが控えております」
「ごめんなさい、もう大丈夫です」
すぐに、張り巡らされた幔幕が上がった。かがり火に照らされて輝く黒い肌、理系青年メディクスがいた。
「お疲れだったのでしょう。道も良くはありませんでしたから」
「乗馬を覚えます。絶対に」
私が決然というと、メディクスは若々しい顔に微笑を浮かべた。
「竜人閣下ならば容易なことでございましょう」
「やめて下さいよ、竜人だかなんだか知らないけれど、私は一介のジョシコーセーなんだから」
ジョシ……？　と怪訝そうな顔をしているメディクスには気の毒だけれど、解説する気はない。
「運動が得意ってわけでも、武術に優れているのでもないって事です。ドンくさい女なんです。過大に評価しないで下さいね」
いうだけいうと、私は彼の横を素通りして外に出た。
幔幕の外は板が張り巡らされた塀に囲まれていて、ちょうど陣営

の中に部屋が作れたような形になっていた。板も柱も新しいから、私が来るというので大急ぎで作ったのかもしれない。
たかだかこんな女子高生一人のためにとも思うけれど、それだけ、彼らにとって、この世界の人たちにとって、竜人というのは大きな存在なんだろう。
その一画の端に空いている隙間から抜け出ると、そこには、木塀で囲まれた大きな空間が広がっていて、いかにも陣営地、という感じになっている。
カストゥルム、という。
ローマの陣営地といえばその作り方の徹底振りで有名。そのまま、街に発展することも少なくなかったくらいで、たとえばドイツのフランクフルトやボン、オーストリアのウィーンなんて、ローマ軍の宿営地を基礎に出来て発展した街。
この陣営地は、そこまで巨大なものじゃない。
というのも、人数が少ないからだ。
カルスが出発直後に解説していて、馬車酔いがピークを迎える前の、かろうじて意識を保っていた私の記憶にも残っていた話では、ミュシア騎兵団とやらいうこの兵団、数でいえば千を少し超える程度らしい。
古代ローマの軍団レジオは、一個軍団で一般に五千から六千ほどの兵を抱えていた。一個軍団単位で陣営地を建設するのが常だったらしく、その規模は確かに街に匹敵する大きさになっただろう。
でもこの兵団は、実際には馬に乗らず、騎兵のサポートを任務とする軽装歩兵なども全部含めた上での千人規模だから、そこまで大きな陣地を築く必要が無い。
というわけで、だいぶこぢんまりとした陣営地らしいんだけれど、私は陣営地自体初めて見るから、いちいち感心できる。
建築なんてずぶの素人だからよくわからないけれど、陣営地の建物や塀は、かなり本格的に見える。建物の基礎なんて、ちゃんと石が組み上げてあったりするらしい。

兵士たちがたくさん外に出て、それぞれに食事を作っている光景が眼下に広がっているけれど、そのかまども、その辺りの石を組み上げただけのものじゃない。ちゃんと兵営らしき建物と道路の位置に合わせて、がっちりとした物が作り上げられていた。

道路だってすごい。全部じゃなく、四角い陣営の中心に縦横一本ずつ、十字を描くように作られた道路だけだけど、ちゃんと石畳で綺麗に舗装されていた。

こういう光景を見ると、この世界、やっぱり古代ローマそのものって感じだよね、という気がする。なんというか、やることが徹底している。

私が姿を現すと、そのしっかりした陣営地の中に一気に緊張感が広がっていくのがわかった。

なぜわかったか。

作っていた食事が、一斉に片付けられていくのが見えたからだ。かまどにかけられていた鍋が下ろされ、たちまちのうちに兵営の中に運び込まれていく。

そしてその辺りにいた兵士たちがわたわたと後片付けをし、私に向かって正面を向いて直立不動になる。

私は呆れると同時にあわてた。ちょっと待った、私が来たくらいで食事の準備中断とかやめてよ。食べ物の恨みを買う気なんか無いって。

メディクスがその様子を察したようで、後ろから声を張り上げた。

「食事の準備はそのまま続けよ、平常の通りにせよ」

その声は、今まで私を相手にしていたときとは桁が違う声量だった。本気で驚くくらい。

ああ、この人、本当に指揮官だったんだ。そう思えたのは、彼のよく通る声が響き渡った後、ちょっと躊躇は見えても、兵士たちがいそいそと食事の準備に戻っていったからだ。

「失礼しました」

そういって再び私の後ろに控えたメディクスは、士官、というよ

りは、名前の通り医師として活躍しているほうが似合っているような、理知的でおとなしそうな青年だ。
私が起き出したことを知ってか、すぐにカルスが現れた。
「ご気分はいかがか」
「ご迷惑かけました。もう大丈夫、お腹もすいてきたくらいだから」
「それは重畳。こちらも準備が整ったところだ」
カルスは相変わらず涼しい顔をしている。
「準備って？」
「食事だよ、われわれの」
他に何がある、とでもいいたげにカルスは告げると、肩からかけている長衣（トーガ）のすそを直すようにパッと手を払い、姿勢を正した。
そして左足を引いて半身になる。
何をする気だ？
私が反射的に警戒すると、カルスはやや声を張った。
「ミュシア王国騎兵隊長マルクス・コルネリウス・ルクスよ、光栄ある竜人閣下御自らのお越しである。ご挨拶申し上げるがよい」
あ、こいつ、いきなり連れてきやがった。
確かに彼に会いに来たわけだけれど、いきなり連れて来るのはなしでしょ。こっちにだって色々心の準備というものがだね。
なんていう私の思いなんか関係なく事態は進む。
カルスが半身になった先に、これまた長身の青年がいた。両側から火明かりに照らされ、揺らめくような影の中に、精悍な黒服の青年が立っている。
軍衣なんだろう。短衣の上から羽織っているのは、カルスのようなトーガではなく、ケープ状の黒い布。
その裏地が、真紅だった。燃えるような紅。
精悍で少しの無駄もない体つき、優美なほどに整っているのに少しの甘さも無い眉目、精細な造作の口元にも厳しさが漂っていて、マルクス・コルネリウス・ルクスという男、二十代前半の若さなのに、外見から既に他を圧する雰囲気がある。

私は軍の司令官なんて人種と会った事なんかないわけで、比べる材料なんか持ってないけれど、少なくとも時代劇や大河ドラマで見る若手俳優じゃ絶対に出せないオーラのようなものを放っている。
やくざの若手幹部、の方が近いかもしれない。
「ご挨拶が遅れ申し訳ございませんでした」
私の手前、ちょっと離れたところにひざまずいた騎兵隊長は、ゆったりとした口調でそういった。声の調子も落ち着いていて、現代ならまだ新卒社員の年代なのに、ずいぶん老成したような印象がある。
「この国の騎兵を取りまとめております、マルクス・コルネリウス・ルクスと申します。竜人閣下に置かれましては、以後お見知りおき下さいます様」
丁寧なご挨拶ですこと。
「こちらこそ。自分の立場もよくわかっていない小娘ですので、よろしくお導き下さい」
私が言うと、騎兵隊長はわずかに表情に意外そうな色を浮かべた。ような、気がする。
「彼は」
とカルスがいう。
「この国の王の次男であり、多忙極める王に代わり、あなたの案内を務めることになっている」
カルスの言葉に、わずかに上半身を沈めることで、騎兵隊長は同意を示した。
「これまでルクスといえば彼の父のことだったが、王に登極した今、彼は名のルキウスで呼ばれることになる。一般には、今後はこの男こそがルクスの名で呼ばれることになる」
つまり、ルクスと呼べ、ということね。
「竜人は一つの陣営に肩入れし、その発展に寄与するがごとき小さな存在ではない。偶然にもその光臨がクレスではあったが、ここで現在の世界の状況を確認された後、よりよい道に世界を導くため、

竜の代理人として働くべき御身だ」
　カルスは涼しげな表情のまま淡々と話す。
「ルクスよ、事情が許す限り、竜と竜人閣下のために砕身せよ。それがこの世界の平穏と発展のために、卿の成すべき神聖なる義務である」
　なんかよくわかんないけれど大げさなこといってるなあ、とぼんやり聞いていると、ひざまずいたまま騎兵隊長氏が深々と礼をした。
「沙紀どの、まずはこの者とその配下の者どもが御身の守りを務める。私が最大限、知の補佐を行おう。まずは竜人たる御身が何をなせるのか、何をなすべきなのか、それを知るために、我らに御身をお預けいただきたい」
　目の前にはカルスと騎兵隊長氏、メディクス、その部下らしき何人かの兵士たちがいて、カルス以外はみんなひざまずくか平伏していた。それを見ている、ちょっと離れたところにいた兵士たちも、大抵がひざまずいて私を仰いでいる。
　異様な光景で、かなりびびる。なんだ、これは。
　竜人って、いったいなんなんだ。
　私が無言でいるのが、たぶん周囲の緊張感を高めているんだろう。空気が異様に硬いのがわかる。みんな、緊張している。たぶん、私がどうこうじゃない。竜人って、それだけみんなにとって特別な存在なんだ。
　どうしてそんなものになっているのか、本当に自分が竜人とやらなのか、何もわからないけれど、今の段階でわかるのは、私がそれなりなことをいわないと、この異様な場が終わらないということ。
　みんなが食事タイムに移れないということ。
「……まずはお任せします。私が何をなせるのか、それを知るまでは、不肖の身をお預けします。よろしくお願いします」
　良きに計らえ、とふんぞり返っていおうとも思ったけれど、空気を読んでやめる。代わりに、当たり障りのなさそうなことをいってみた。

そのセリフはこの場では正解だったみたいで、騎兵隊長氏を筆頭に居並ぶ男たちが一斉に頭を下げた。
「かしこまりました、閣下。ミュシア騎兵団一同、必ずや身命をとして御身をお守り申し上げます」
黒衣の隊長が陣営を圧するような大音声で口上を述べると、兵士たちが一斉に「アヴェ・ドゥラコ！　アヴェ・ドゥラコ・ホミニス！」と叫び声を上げた。
けっこうびびる。
意味は簡単。「竜万歳、竜人万歳」。
陣営中の兵士がいつの間にかこの近辺に集合していたらしく、その叫び声は夜の空気を割って轟き渡った。
しばらくそのシュプレヒコールが続き、そのうち、騎兵隊長ルクスが立ち上がった。同時に兵士たちの声が止まる。
ルクスは一度頭を下げるようにしてから上半身を起こし、後ろにいるメディクスに声をかけた。
「兵を戻せ。竜人閣下には改めて我らが陣営をご案内申し上げる」
「了解」
メディクスはうなずくと、身を翻して兵士たちの中に入っていった。
「さて」
カルスが、今までの荘重な雰囲気を脱ぎ捨て、ごく日常的な声になった。
「食事にしよう、マルクス。竜人閣下も、じつはこの世界にお越しになって以来、まだ何も食しておられない」
口調が砕けていた。
マルクス、と名前で呼ばれたルクスの方も、雰囲気が柔らかくなっていた。
「それはお気の毒な。失礼にも程があるだろう、知の支配者ともあろう者が」
「色々あってな。早速ですまんが、晩餐の手配を頼む」

「それは構わんが……閣下、なにぶんこの通りの場ゆえ、大したおもてなしも出来かねます。よろしければ、クレスなり他の都市なりでおもてなしをさせていただければ」
騎兵隊長ルクスは、顔立ちがカルスとは別系統だけれど異常に美しい。それだけに冷たそうにも見える。口調も決して暖かかったり親しみやすい感じじゃない。でも、なぜか度量の大きさを感じさせる雰囲気があって、不思議と他人行儀な感じがしない。
「いやあ……移動はちょっと」
正直にいうと、カルスが笑った。笑いやがった。
「移動は勘弁してくれ、たった今まで地獄の苦しみを味わっておいでだったのぞ」
「誰のせいだよ、いいだしっぺのくせに」
ちょっと本気で腹が立つ、この男。
ルクスはうなずくと、「ではこちらへ」と案内してくれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0066y/

竜人少女

2011年12月14日23時51分発行